

# 北 ぞらくろあ

第111号 2025年6月1日（毎月1日発行）



駅舎はなく簡素な待合室だけの“停留駅”だ



「南大東驛」と刻まれた石碑が利用客を迎えてくれる

## 木次線ストロール⑭ 南大東駅

### 「駅名を刻んだ記念碑と

### 創世の三神を祀る神社」

5月18日の日曜日、五月晴れとはいかず、今にも雨が降りそうな曇天。どら書房は5月より日曜日

米不足で米価高騰のおり、豊作であつてくれと心から願う。いつものように国道183号線を備後落合駅の手前で左折、国道314号線を登ると、周囲の山林の、ヤマフジの花房の藤色が鮮やかになる。野フジとも呼ばれる野生種。高度による気温差で花期が遅れて、今が満開なのだろう。巨

木に蔓が巻きついて、まるで巨大なフジのツリーである。ちなみに園芸用のフジの蔓は右巻き（時計回り）で、ヤマフジは左巻きである。2時間余りで木次駅に到着。途中、晴れ間が覗くこともあつたが、小雨が降り始めている。駅の近くにある小学校では運動会が開かれていたが、生憎の天気である。次の列車までかなり時間があるので、先月は行かなかつた駅前の食品のスーパーや百円ショップ等々、さまざまなテナントが入つ

ている。日曜日ということもあつて人出も多い。フードコートで早めの朝食を済ませた。お年寄りのグループが談笑していて楽しそうだ。駅の券売機で190円の切符を購入、木次線で券売機を利用したのは初めてだ。駅員も常駐していき。11時52分発の六道（しんじ）行きに乗車。運転手の交代による待ち時間、かなりあるので降車する人も多かつたが、発車する頃にはわたしを含めて10人ぐらゐの乗客。ほとんどの人が旅行客の装いだ。

市街地を抜けて田園風景を走り、5分程で南大東駅に到着。降車したのはわたしひとりだけ。一車線のホームにコンクリートブロックを積み上げた待合室があるだけの駅だつた。開業は昭和38年（1963年）と、木次線では一番新しい駅である。住民の強い要望で、木次駅―出雲大東駅間に新設された。芸備線の広島・庄原市の平子駅や内名駅と同じような経緯である。島根NEWS・WEBで配信されている「木次線18駅の物語」の南大東駅編を見たが、開業時のセモノーの写真では、ホームが見えない程に人が溢れている。120メートルの長いホームは今でも健在で、往時には7両編成の列車が停まることもあつたという。当



創世神の三柱をお祀りしている佐玉神社



仏様が坐す三界萬靈の供養塔

三界とは、欲界（よ  
くかい）、色界（しき  
かい）、無色界（むし  
きかい）の三層を意  
味している。慾界は  
最下層で、淫欲・食欲・

がある。曹洞宗の禅  
寺らしく、本堂は質  
実剛健な作り。参道  
の脇に、三界萬靈塔  
がある。三界萬靈塔  
はときおり見かける  
が、文字だけのもの  
が多く、仏像を乗せ  
た萬靈塔はあまり見  
たことがない。文殊  
菩薩様だろうか。禅  
寺らしく、どっしり  
と坐している。



途中で何度も休憩を入れながら、木次駅まで歩き通すことができた。腰痛に悩まされるようになって、これだけ歩けたのは初めてで、ストロー（ぶらぶら歩き）を楽しんだ。

初から駅舎はなく、停留所タイプの駅だったようだ。芸備線では駅舎のない“秘境駅”はけっこうあるのだが、木次線では油木駅以来2駅目。  
ホームの穴道方面の先に踏切があるのだが、「鉄穴踏切」という看板が出ている。「鉄穴（かんな）流し」は砂鉄を採取する方法で、この辺りでもたたら製鉄が盛んだった証左だろう。

置かれているのだが、見当たらない。撤去したのだろうか。  
汲み取りトイレを利用させてもらって、待合室の使い込まれた木のベンチに腰かけた。田植えの済んだ田から、蛙の鳴き声が聞こえてくる。小雨が降っているからか、元気が良い。ゆったりと寛いだ気分、自然の中のローカル駅の魅力である。  
折畳傘を広げて出発。ホームから県道24号線（松江木次線）に出る途中に、自然石で出来た大きな石碑がある。「南大東驛」と刻んだ文字が読み取れる。こんな立派な駅の“看板”は初めてだ。開業時の喜びの大きさがうかがわれる。  
県道を松江方面に少し歩くと「佐玉神

社」がある。参道や境内が掃き清められていて、沿道の植木も丁寧に剪定されている。大切に護持されているのだろう。  
主祭神は、国常立命（くにとこたちのみこと）、国狭槌命（くにさづちのみこと）、豊斟淳命（とよかみじむのみこと）の三柱。「日本書紀」では、天地開闢の後に国常立尊、国狭槌尊が登場し、次に豊斟淳尊が化生したとされており、言わば創世の神々。島根県神社庁のサイトによると、古（いにしえ）は三昧妙見社と呼ばれていたという。三柱は男神であるとも記されていて、三人兄弟のわたしは親近感を覚えてしまった。今回の取材旅行の無事を祈願した。

睡眠欲など、本能的な欲望が強い世界。その上の色界は形あるものの中で、欲望を離れた浄妙な物質からなる世界。その上の無色界は、欲望も物質的な面も超越した、精神的な要素のみからなる高度な世界。  
その三界を超越したところに仏様の世界が存在するのだが、輪廻するすべての靈魂、つまり墓石のない無縁仏をも救済するのが「三界萬靈塔」……、あくまでも我流の解釈であるが。合掌して叩頭、思わず苦笑を浮かべてしまった。神社に参拝した後で、仏様にもお参りしている。日本人だなと思う。

# 「棚田に生きる」

高柴順紀（菊栽培農家）

比婆の山あいの村々では殆どが棚田だ。水の流れる谷筋はむろん、山の中でも水が引ける場所には大小を



山田の写真（10年ぐらい前に白黒ワイドで撮影）



昭和50年頃の湯谷集落の航空写真

る。ここへは雑木林の急坂を登らなくてはならないが、世間でもてはやされている他所の棚田の風景に決して負けない。近辺では当たり前の景色だから、昔から棚田などと言ったことはない。

はつきり言って棚田からの収入は少ない。なのに領主や国から年貢とか、税金だとかいわれて利益をむしり取られてきた歴史でもあった。貧しい日々の生活のもとで田んぼを守ってきたのは、これらの土地を自分が所有しているという小さな満足だけでは説明がつかない。生きてる証の誇る文化があるのを忘れてはならないと思う。

百姓の日々はしんどいが、田植え時期は田植え唄があちこちから聞かれた。難儀な田植えも、左下（さげ）の唄に五月女が唄で掛け合いながら続けたのである。

良寛も聞いたらしい。

手もたゆく植うる山田の五月女が唄の声さえやや哀れなり

楽しそうには聞こえなかったようだが、比婆でも普通に見られた風景であった。分厚い田植え唄本を暗記して、左下は太鼓も打ちながら一日中五月女たちを楽しませ、鼓舞したのであろうか。「大仙歌」では米子や

大山周りを唄い、「京上り歌」では明石、大阪、京都の名所、旧跡を唄っている。また若い五月女たちにとっては教育の場にもなる歌もあった。

時には大がかりな大仙供養田植もあり、パロラマ写真の山田のそばで行われた様子を神楽大夫の藤原元美さんの私信から紹介したい。「湯谷の川上熊蔵さんと佐藤角次郎さんが主催されて、大拍子入りの供養で、若者が大拍子を習って舞おうと話し合われ、大拍子本唄を小奴可の柳生さんに習い、大拍子を加谷の池田さんに来てもらい、氏神さんで練習して出来上がり、湯谷条の牛供養が出来、サゲさん十六人、舞子十四人、五月女二十四人、牛の二十八頭で賑々しく一日過ぎました。」年月日が記されていないのが残念だが昭和十年台だろうか。

もう一枚は基盤整備する前の湯谷集落の写真だが、比婆の多くの棚田が原野化し、草木の中に畔だけが骸（むくろ）のごとく見られる時代となっていました。

## 《参考文献》

『棚田の謎』田村善次郎（TEM研究所）OM出版

## ハロー注意報⑱

——進駐軍がいた町のはなし

# 忘れ得ぬともがら

松岡初枝

私は今も元気で働いているが、同時代を共に生きて来た友達を思い出すと、もう一度会いたい人や、もう二度と会えない人が目に浮かんでく

る。世間は七十五歳を越えると、「後期高齢者」と呼ぶが、そんな括りなんて大きなお世話で、他人（ひと）さまから決めつけられるなんてまっぴら御免である。さりとて

八十歳近くになると涙脆くなるのも事実で、友の死や病氣を知った時、何とも切ない思いをすることが多くなった。

今も心に残っているひとりにH君がいる。H君と私は小学生の六年間ずっと同じクラスだった。男の子にしては小柄で細身であるが、運動神経は抜群で、運動会では花形的な存在だった。走れば、短距離も長距離もどちらも速い。走り中跳びだつてふわりと跳び、カッコ良く着地する。体育の授業の時、私が不得意な跳び箱を跳ぶ「コツ」を教

えてくれたおかげで、六段まで跳べるようになった。

H君は一度も遠足に行ったことがなかった。理由は乗り物酔いだったが、一度新聞屋のトラックの助手席に乗っているのを見たことのある私は、何か変だなあと思っていた。六年生になって修学旅行に行く時も「乗り物に酔うから行けません」と悲しそうに言った。当時は遠足も修学旅行も、全ての行事は自費で、家庭の事情でお金が出せない人は欠席した。今なら行政で何とかしてくれるが、あの頃は集金袋に費用を入れて先生に渡していた。お金を出せないと当然のように欠席になってしまったのだ。おせっかいな私は、H君の居ない所で、クラスの人達に「お菓子用のお金、H君の旅行代にしようよ」と提案した。ほとんどの人が賛成してくれた。「H君、本当は酔うんじゃない。クラスみんなで行こう！」N先生にもその事を言った。「皆で決めたことだ。先生も出すからね」と言ってくれた。

修学旅行の直前、H君の母がクラスに来て「皆の気持ちは涙が出る程嬉しいけど、この子だけ行かせてやることは出来ないんです。兄ちゃんも姉ちゃんも行けなかった。父ちゃん

んが病気で働けないから。皆本当にありがとう。ゴメンネ」泣き顔で言うとうと肩を落して帰って行った。旅行が終り、作文を書いた。「行かなかった人は、家でどう過ごしたか書けばいいよ」と先生が言った。「ボクは乗り物に酔うから行けなかった。旅行の日もいつものように新聞配達をした。その後悲しくて、一日中寝てしまった」とH君は書いた。文集が出来て、それを読んだ私は、ワラ半紙の文集のH君のページに、大粒の涙で染みを作ってしまった。

H君は定時制の高校に進み、学校で知り合った人と婚約中、骨肉腫で死んでしまった。二十歳になったばかりだった。「何で彼ばかり…」今も跳び箱を覚えてくれたH君の笑顔を思い出すと、与えられた命を大切に生きてゆこうと思う。「H君、いつか私もそちらに行くけど『はっちゃん、ババアになったな』って言わないでよね！」

S子ちゃんは長い髪を三つ編みにして、目が大きいチャームングな子だった。「はっちゃん、家（うち）に遊びに来ない？ 兎がいっぱいいるんだよ」「ワァー、兎抱っこしたい！」。家に帰って「ネエ、S子ちゃんの家に行っていい？ 兎が居るんだって」



小学2年の遠足（狭山湖）。前列左から5番目が私（著者）



小学6年の臨海学校。神奈川・久里浜にて。左が校長先生、右がN先生。前列右2番目が私

「S子ちゃんて、駅むここのKさん所の子？」祖母と母は顔を見合わせ「おジイちゃんに訊いてごらん。おジイちゃんがいいって言ったら行っておいで」。祖父は「友達と仲良くするのはいいことだ。駅むこうだからジイちゃんが踏み切りの所まで送ってゆくよ。帰りも迎えに行くから」

土曜日の午後、S子ちゃんの家にいった。「はっちゃん兔の子抱っこする？」「うん！」フワフワの毛だった。「ネエS子ちゃん、どうしてこんなに沢山兔がいるの？」「兔が大きくなったら売るんだよ」「えー売っちゃうの？」「お肉や毛皮にするの。売ってお金にするんだよ」「えー兔たち死んじゃうの？」。後で知った事だが、S子ちゃんの住む家は同和地区にあり、動物の肉や毛皮を売ったり、清掃屋をして人達が多く住む地区で、

町の人からは少なからぬ差別を受けていた。祖母と母が顔を見合わせて「おジイちゃんに訊いてごらん」と言った理由や、祖父が送り返えると言ったのもその事があったからだった。祖父は東京の人で、古くからこの地にある被差別地区への差別が大嫌いだったと後で知った。ただ我が家は美容室をしていたり、祖父の会社『農村工業』に仕事を頼みに来る同和地区との交流があったので、差別に組ることが無かったように思う。S子ちゃん

の家にいった時、S子ちゃんの父母が涙顔で迎えてくれた理由も、全てがこの被差別地区に住んでいるからだった。S子ちゃんはそのなにもめげず、元気で明るい子に見えた。後年、S子ちゃんが遠方へ嫁いで行ったと聞いた。同窓会に出席することも無く、この町に来ることも殆ど無い。結婚するにも差別がついて廻るので、遠方へ嫁いで行ったのだ。S子ちゃんはきつと地に足のついた人生を送っていると思う。「自分の生家や自分自身の責任じゃないよね」と言ってるやうい。兔を抱っこした私と二人で、おばさんが作ってくれたおにぎりを食べながら大笑いしたあの日を、生涯忘れることは無い。

この一、二年は喪中葉書がめつきり増えた。ちよっと前までは親や兄弟の死が理由のものが多かったのに、近頃は友達当人の死を報らせる妻や子供からの葉書が多くなった。淋しさ悲しさが募る年の瀬は何ともせつない。中学生の頃、生徒会と一緒に運営したT君やM君。T君は小学校の六年間ずっと同じクラスで、あのH君とは大の仲良しで、彼の死を心から残念がっていた。同窓会の際には、いつも彼の想い出話をしたり、彼の席を作ってビールのグラスを置いてやっていた。その心優しいT君も去年逝ってしまった。去年の夏にはM君も逝った。良家の坊ちゃんの彼は、中学時代から仲良しだった一人で、まだまだ元気で古本屋で働いているS君と三人で、学生時代から食事に行ったり、美術展、クラシックコンサート、映画にも行った。デコボコ三人組はずっと欠かせない同志のような存在だった。残されたS君と私は、ポツカリ開（あ）いた心の穴を埋めることが出来ないままにいる。

センチメンタルになった時、私には店や仕事がある。今も元気で店に来てくれる同級生がいる。「ほら〇〇ちゃん、背中が丸くなってるとよ、伸ばさなくちゃ！」「はっちゃんは仕事してるからいいのよ。私も体動かそう」「そう、その意気！」。大変な時代を生きて来た大切な友には、いつ迄も世に憚ってほしい。ジジ、ババだってまだまだ役に立つぞ！



猫の鳴き声をする。ミーミーという仔猫の鳴き声だ。カリカリと段ボール箱を引っ掻く音もする。

「見させてもらってもいいですか？」  
了解を得て、箱の蓋を開いた。真つ白な仔猫だった。段ボール箱のすみみ後ずさつて、青い瞳で睨んでいる。大丈夫だよと「チャツチャツチャツ」と舌で湿った音を立てながら喉を撫でると、目を細めてゴロゴロと喉を鳴らした。

奥さんの月命日の墓参りに行ったお寺で、里親を募集していたのだという。たまに来る七十年輩のお客さんで、名前も知らないのだが、けっこう長時間滞在しているので本好きなのだろう。購入する本も、自分の好みがすっかりしていて趣味が良い。ときおり奥さんも連れて来たのだが、亡くなられたことも知らなかった。

「家内が猫好きだったんですが、喘息の持病があつて、ペットはどうしても抜け毛があるからと、医師から禁止されてたんですよ。わたしも、どちらかというところの方が好きだったので……」

山本文吾さんがおもむろに立ち上がって、わたしの手にじゃれついている仔猫を見た。

「吾輩は猫である……、名前は？」

飼い主が照れた笑いを浮かべて、「シヤガにしようと思つています」と答えた。「お寺の参道に、シヤガが群生して咲いていたものですかから」「いい名前ですね。シヤガは大陸から伝来したのですが、中国では胡蝶花と呼ばれていた。それが日本でどうしてシヤガになったのかよくわかつていないんです。『白髪』を方言でシヤ

だと思つていた。

「この世がまだ清らかだった昔、この世のすべての花が参加して祭りを催した。その中に、青い着物の瀟洒(しょうしゃ)な美少年がいた。花たちはみな魅了されたが、誰も少年の名前を知るものはいなかった。そのとき突然、大空に美しい虹が出た。七色の虹の光が少年の青い服に映えて、ひとしお気高く輝いた。それを見た

## 射<sup>しやが</sup>干の花

あきふゆひこ  
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑩2

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

ガと呼ぶ地方があるので、白くてフワフワしたシヤガの花をそう呼ぶようになったという説もありますから、白い猫にぴつたりです」

博覧強記、文吾さんは膨大な本を読んでいる。  
「男の子ですか？」

文吾さんの問いかけに、飼い主が頷いたので意外な気がした。上品でやさしい顔をしているので、女の子

花たちは、少年を『虹の使』と呼ぶことにした」

詩でも詠唱するように語った。

「その少年こそアイリス、シヤガのお仲間です。シヤガの学名は『アイリス・ジャポニカ』、日本のアイリスと名付けられているんです。本当は帰化植物なのに、すっかり日本になじんでいます」

飼い主が感激した面持ちで「名前

負けしないように、大事にしないとだめですね」と言うと、文吾さんがニヤリと笑った。今までの話は、これから一緒に暮らす仔猫や飼い主に對する文吾さんなりのエールなのだろう。飼い主が購入した五冊の本の中に、猫に関連したものが二冊含まれていた。

「おれも猫と一緒に暮らしたことがあるんだよ」

文吾さんが缶コーヒを飲みながら、ぼそりと呟いた。

「実家で飼っていたんですか？」

「いや、単身赴任で一人暮らしをしていたときのことだ」

らしくないと思つてしまった。

「猫の名前は？」

「ない」

エツと声を上げてしまった。シヤガという名前について、あれだけの蘊蓄(うんちく)を聞かされた後なのだ。

「よく名前を訊かれたんで、名目上の名前はある。動物病院に連れて行ったときも、名前を記入する必要があるからな。でも、そんな名前と呼んだことは一度もない。もう大人の猫だから、今さら勝手な名前を付けるのは傲慢な気がした。飼つてい



るといふ感覚もなかったかな。彼女を閉じ込めているんだから、世話をするのは当然だと思っていた。外で気ままに暮らしていたんだ。その自由をおれが奪ったんだからな」

「こんなきれいな野良猫がいるんだと、文吾さんの一目惚れだったという。」

「社宅の庭に姿を現すようになったんだが、美しい白猫で尻尾と額にキジトラの模様が入っている。餌をやっても、警戒心が強いのか、気位が高いのか、決して体を触らせてくれないんだ。そのうちおな

が大きくなって、仔猫を三匹、連れて来るようになった。里親は見つかったんだが、親猫をなんとかしろと言われて、市から捕獲用のゲージを借りてきた。すぐに捕まったんだが、そのゲージのそばに、大きな黒猫が現れた。仔猫が白と黒の斑（ぶち）だったので、間違いない父親だ」

当時のことを思い返すように、缶コーヒーを飲んでしばらく間を置いた。

「満月の夜だったのを覚えている。近所のノラのボス猫で、野武士のような貫禄があった。背筋を伸ばして、前足を揃えたエジプト坐りで、じつとゲージを睨んでいる。そのとき、おれと視線が合ったんだ。怖がることもなく、堂々と見返してきた。悪役はおれの方だと自覚したよ」

猫を自分と対等に扱っている。「悪いな、と声をかけると、ボス猫が頷いたような気がした。悠然とした足取りで、夜の帳（とぼり）に姿を消した。ボス猫の姿を見たのは、それが最後だった。その後、何日かして、近所の野良猫の姿が一斉に消えたんだ。野良猫狩りの“粛清”にあったと噂されたが、本当のことはわからない。避妊手術をした後でリリースするつもりだったんだが、一

緒に住むことにした。社宅だとペット禁止だから、わざわざそのためのアパートを借りたんだ」

「凶々しい性格なのだが、妙に律儀なところがある。」

「どのくらい一緒に暮らしていたんですか？」

「三年ぐらいいかな。寒い土地だったんで、冬場はおれの布団の中にもぐり込んでくる。暑い夏は枕元に蹲って、ベッドの鉄の棧（さん）に肉球を載せて寝ていたよ。おれの禿散らかした頭をペロペロ舐めてくれたし、前足でやさしくフミフミしてくれた。今、思い返しても楽しくて濃密な時間だった……」

手に持ったアルミ缶が、ペコンと音を立てて凹んだ。

「腎臓をやられてね。餌を食べなくなつて、どんどん痩せてしまった。人間だったら人工透析をするんだが、猫はせいぜい点滴するぐらいしか治療法がない。おれの手の中で亡くなったんだ。あんなに泣いたのは、後にも先にも一度だけだ」

鬼の目にも涙……、やさしい天邪鬼（あまのじゃく）なのである。

《参考文献》

「植物と神話・花と木とロマンの詩」

近藤米吉編著（雪華社）

## まちの古本屋さん どろ書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。
  - ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
  - 定休日：毎週日・月・火曜日（5月より日曜日も休みます）
  - TEL: 090(9913)3052
  - 営業時間 9:30～18:30（昼食休憩 12:00～12:30）
- ※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

# 「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

## 第四部 祭事を見る

八月十五日 放生会（ほうじょうえ）

捕らえた魚介・鳥・動物などを殺さないで、池・川・山林に放つ法事。仏教の善行の一つであるが、神仏混淆の時代では神事であった。そして、明治の神仏分離後は、神事としての放生会は廃止され、代わりに中秋祭が行なわれるようになった。

この放生会は、インドでは釈迦在



世の時から行われていたと伝えられ、日本では飛鳥時代ころ宇佐八幡宮で養老四（七二〇）年、初めて行なわれた。平安時代には勅令によって営まれていた。鎌倉八幡宮では文治三（一一八七）年から行なわれるなど、各地の八幡宮で古くから行なわれていた。

※画像は源頼朝が行なった鶴岡八幡宮の放生会を描いた月岡芳年の浮世絵。

九月十五日 江戸神田祭

現在五月十四、十五日に行なわれている祭である。明治の改暦（一八七二年、明治五年）以前は、九月十五日に行われていた。祭の季節の、これほどの変わり様は定かでないが、九月というのは時期的に台風が多く、大きな山車が風雨に耐え

切れないということ、安全面を考慮したのではないかと。

江戸を代表する祭は、日枝（ひえ）神社の「山王（さんのう）祭」と神田明神の「神田祭」である。双壁をなすこの大祭は別名「天下祭」とも「御用祭」とも称されたように、將軍家がからんだ公認の祭だったため、盛大に執り行われた。江戸城内に祭列が入ることを許されたのは、元禄元（一六八八）年からといわれている。

神田明神の祭神は、大己貴命（おなむちのみこと、だいこく様）、少彦名命（すくなひこなのみこと、えびす様）、平将門命（まさかど様）の三神である。

九月十七日 伊勢神宮神嘗（かなめ）祭

伊勢神宮の数ある祭儀のなかでも一番の大祭である。例年、十月十五日から十七日に行なわれる。古くは、旧暦九月十一日に勅使に神酒と神饌（しんせん）とを授け、十七日に供え奉っていたが、明治十二年以後、十月十七日に執り行われるようになった。この祭は、天照大御神が天上の高天原において、新嘗（にいなめ）を食したという、『古事記』の神話に由来し、その年に収穫した新穀を由貴（ゆき、清浄な、穢れないとい

う意）の大御饌（だいまけ）として天照大御神に奉る祭である。

神嘗祭はすでに『大宝令』に国家の常典（じょうてん）としてみえ、『延喜式』にも、踐祚（せんそ）大嘗祭に次ぐ中祀と定められた国家的な重儀と位置づけられていた。戦前までは、この日は国の大祭日とされていた。

神饌…神に供える飲食物の総称。踐祚…天皇の崩御、あるいは譲位によって皇嗣がただちに皇位を受け継ぐこと。皇位継承。

九月廿九日 神送り

旧暦九月晦日、または十月一日に、全国の神々が出雲大社へ旅立つこと、またこれを送る行事である。それぞれの地方では、独自の呼称での事になる。それが「神のお飛び」「神のお立ち」「神の渡し」などと呼ばれる行事で、たとえば九州の長崎や千葉県安房（あわ）地方辺りでは「お登り」、和歌山県などでは「お飛び」などと呼ばれている。

十月十一日 出雲大社の神在祭

旧暦の十月に約一週間行なわれる行事である。全国の神様が出雲大社に大集合し、来年の収穫や男女の縁結びを相談する「神議（はかり）」が行われるとされている。

# ヨーロッパ23日間「卒業旅行」(九)

マック☆ヤマザキ

2月26日月曜日、ローテンブルク  
くアウグスブルクくミュンヘン。今  
日の目的地は、「ミュンヘン、サッポ  
ロ、ミルウォーキー(米国)」と日本  
のビール会社のテレビ・コマーシャ  
ルで、語呂合わせがよいミュンヘン。  
世界のビールの本場を北緯45度に重



ねたキャチフレーズは、言葉のリズ  
ム感があり評判となった。

途中のアウグスブルクで昼食時間  
として1時間とった。ミュンヘンに  
次いで、ドイツで2番目に雪の多い  
都市と言われている。そのときも雪  
がちらほら舞って、寒さも次第に強  
まってきた。添乗員の私は、わざと  
昼食場所の情報を与えることなく、  
心を鬼にして学生たちだけで、今や  
吹雪となった街に送り出した。

これまでも学生達は「サバイバ  
ルゲーム」に近い経験をしてきたの  
で、学生達だけでも大丈夫だろうと、  
2、3人一組で散らばって行かせた。  
学生達はどうにか昼食をすませて、  
午後1時半に出発することができた。  
英語で案内してくれるドライバー  
のフレディーが、ミュンヘンに行く  
途中に第二次大戦中ユダヤ人を収容  
した跡地に連れて行ってくれた。ミュ  
ンヘン郊外のダッハウという所で、  
ヨーロッパではアウシュビッツと同  
じくらい特別の恐怖の響きを持って

いる。ナチス・ドイツの人種差別に  
よる絶滅政策(ホロコースト)及び  
強制労働で、最大級の犠牲者を出し  
た強制収容所で、収容者の90パーセ  
ントがユダヤ人だった。残念なこと  
に、施設は月曜日の定休日だった。  
この収容所にはガス室があったこと  
を後で知った。

ホテルに着く前のバスの中で、今  
晩ビヤホールに行き、お互いの親善  
を深める提案をしたところ全員一致  
で話がまとまった。フレディーに頼  
んでホテル近くの歩いて行けるビヤ  
ホールを探してもらった。「マテラ」  
という店で、ビールの中ジョッキ、  
ソーセージの取り合わせ5本、スー  
プ、デザートにケーキがついて24マ  
ルク(約2200円)だった。新し  
くビール等を注文するとき、まっす  
ぐ手を伸ばして「ハイ、ハイ」  
とボーイさんと呼ぶと「ナチス式敬  
礼」となるので、人差し指のみ立て  
て(一本の表示)手を挙げるように、  
学生達にアドバイスした。

本場のビールを飲んで、お互いを  
知り合い、みんなが打ち解けあい、  
今までと違った明るさや解放感が生  
まれてきた。今日は「カーニバル・  
マンデー」とかで昨日に引き続き、  
地元の人々が思い思いの衣装で着

飾ってビヤホールでも浮かれていた。  
学生達の近くの席のドイツ人が彼  
らとコミュニケーションを図ろうと  
するが、ドイツ語はもちろん、英語  
を話せる者がいなので意思の疎通  
に苦慮、話しかけられても答えられ  
ない。照れ隠しもかねて「たぶん、  
こう言ったんだよ」と自分達でデイ  
スカッション? 相手のドイツ人が  
答えを待ちきれなくて、腕相撲をし  
ようと提案した。やっとの思いで気  
まづい沈黙が過ぎ去り、「国際交流」  
となった。

雲(みぞれ)の中をホテルに帰っ  
たのだが、犬が大好きな私は、ホテ  
ルのロビーの真ん中で堂々と寝そ  
べっているワンちゃん(スケッチ参  
照)が気になっていた。ホテルの従  
業員に「誰の犬?」と聞くと、「ホテ  
ルのです」との答え。所有者はホテ  
ルのオーナーなのだろう。それでな  
くとも、ドイツの公園内では犬のう  
んちが処理されていないので気を付  
けるよう、ジョギング中のアドバ  
イスが思い出された。その点、この  
子(ワンちゃん)はうんちもしっこ  
もちゃんとしつけをされているのだ  
ろう。だからこの寒空でも無料でホ  
テル住まいが出来る?

# どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

万緑や千畳閣で太極拳

近藤 昌平

しがらみを絶つ紫陽花の首を剪る

富久光

重力の無きがごとくに桜散る

片岡 正人

みな天を仰ぎて競う花菖蒲

隆愚

朧月読み返している「青い壺」

大槇 三代子

静かなるバラの花咲く出窓かな

寺内 龍二

出雲は雨厄災祓いの鬼面買う

赤川 冬人

露のとう苦さも馳走の春の膳

松岡 初枝

夫の採り来しこの季の味

## 投稿&寄稿

候のことば

「腐草為蛩」

隆愚

曆の七十二候で芒種の次候を「腐草為蛩」(ふそうほたるとなる、又は、くされたるくさほたるとなる)の候といひます。蛩が明かりをともし、

飛びかう頃です。およそ、六月十日から六月十五日ごろです。蛩の幼虫は、土の中で蛹になり、そこから出てきて羽化し、光を出す蛩を見て、昔の人は、枯れて腐った草が蛩に生まれ変ると信じていたそうです。

蛩といえば、きれいな水辺に住む、「源氏ボタル」や、「平家ボタル」を

思い浮かべるかもしれません。「姫蛩」は、陸地の蛩で、藪の中に、点滅する光の帯を作ります。どちらも幻想的な輝きです。

日本には四十種以上の蛩がいて、しかも沖縄には約二十種の蛩がいて、一年を通じて蛩に出会えるといひます。ガジュマルの林にふわりと舞うホタルの光は幻想的です。ちなみに同じ源氏ボタルでも、明滅の間隔が地方によって違います。関西では二秒に一回、関東では四秒に一回、理由はまだわからないそうです。

## 「新刊紹介」

赤川仁洋

新刊紹介の依頼があった。吉川弘文館の人気シリーズで「山陰・山陽の名城を歩く―広島・山口編」(小都隆、古賀信幸編)、定価は2700円十税。「大内・尼子・毛利・吉川・小早川ら、群雄が割拠した往時を偲ばせる空堀や土塁、廓を訪れる者を魅了する。広島・山口の各県から精選した名城七〇を、豊富な図版を交えて平易に紹介」と裏表紙に記載されている。

庄原市からは山内首藤氏の甲山(こうやま)城を、谷本寛氏(庄原市文化財保護審議会)が解説。わた

しも登ったことのある西城町の大富山(おおとみやま)城や、東城町の五品嶽(ごほんがだけ)城も紹介されている。三次市の高杉城にはとりわけ興味を覚えた。本誌の4月号で高杉晋作の墓所「東行庵」(山口県下関市)を紹介。本での言及はないが、晋作のルーツは三次の高杉にあると言われている。近隣の山城には、いつかは行ってみたいと思う。ただし、「刊行のことば」にも書かれていたが、熊や猪が怖いのだ。

新刊紹介は以上だが、本誌をどういう経路で知ったのだろう。その他にも、日外アソシエーツの「地方史情報」のサイトで本誌が紹介され、要請を受けて近年のバックナンバーを寄贈。明治大学博物館に収蔵されて一般利用される予定だといひ。続けているといひいろいろありますね。



# どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など  
情報掲示板です。

## どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して  
いるので、ダウンロードして  
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

## 「庄原を想う会」主催の交流会

「気軽に庄原について話し、仲間の輪を広げよう」

日時：6月28日(土)9時30分～11時30分

テーマ：「庄原の森について

～現状と活かし方～

講師：坂部広和氏

(小串サステナブル研究会)

場所：交通交流施設1 (JR庄原駅隣接)

参加費：500円

(学生200円、お茶菓子代込み)

申込み&問合せ：080-3631-9125 (やない)



## 徳岡政暁 陶芸作品コーナー

陶芸家、画家(徳岡佛性坊)として多彩な  
活動をしてきた故・徳岡政暁氏の陶芸作品  
の展示販売を、どらくろあの一隅でしてい  
ます。

茶碗や花器、陶板や料理皿、多様な作品を  
展示しています。あなたのお気に入りの逸  
品が見つかるかもしれません。

※天井が低いので頭上注意!

## どらくろあ 無人野菜販売コーナー

新鮮で安全な野菜を店頭で販売(値札のないものは百円均一)。  
毎週水曜日の朝に入荷予定。

### ●黒ニンニク好評販売中!●

(青森産ニンニクホホワイト六片使用)

甘みと適度な酸味、ニンニク臭さはありません。  
ポリフェノールを含み、抗酸化作用、滋養強壮などの  
効果が期待できます。

(80g入り 500円)

※増量ジャンボニンニクもあります。

## 「ぐんぐん伸びよう会」

(教室：庄原市川西町241 連絡先：080-3631-9125 やないたえこ)

### 幼児教育の必要性についての Q & A

Q: 「語りかけ」が大切だと聞きましたが、どういう点に注意すべきですか?

A: 単にものの名前を教えるだけでなく、お母さんが感じたこと、今日の前にある物、  
起きたこと等すべてを、言葉に出して話してあげましょう。例えば「まっかでおもしろくないちごね」「あー、  
おいしかった」「空がくもってきたわ、雨が降るのかしら」「きれいなお花、とってもいいにおい」など。

無料体験学習受付中!! お気軽に問い合わせてくださいね。対象者:0歳～小学6年生



## 編集後記

◇南大東駅、事前に  
ネットで調べたのです  
がほとんど情報がない。  
今までの経験では、  
その方が面白いレポー  
トができる……。どう  
でしたか?

◇木次線の取材のあと  
で、木次健康温泉センター「お  
ろち湯ったり館」で汗を流し  
たのですが、休憩室に展示し  
てあった神楽の鬼の飾り面を  
購入。去年来た時も迷ったの  
ですが、売れ残っていたので  
これも縁かな。お客さんの  
子供が泣かなければいいの  
ですが(苦笑)

◇週休3日にして、心身に余  
裕が出来たのか、腰の調子が  
良いですね。もちろん、半年  
以上通っている鍼灸整骨院の  
おかげもあるでしょうね。粘  
り強く、頑張ります!

発行：どらくろあ

〒727-0012

庄原市中本町2-1-10

☎090(9913)3052(赤川)

e-mail: touzin@nifty.com

誌面デザイン: ROUTE183

協賛: 九日市愛好会

第284回

くんちいち

# ひょうばら九日市

毎月九日に開催されている街角市場です。発祥は天正年間（1573～1591）、織田信長が安土城を築いたり、豊臣秀吉が大阪城を築いたころ、物々交換の市（いち）として始まりました。その歴史ある市が2001年に復活、地元の出店はもちろん、近隣他県からの出店＆名産品で賑わっています。



6月9日(月)  
9:00~13:00

TOPICS(開催場所は裏面の地図参照)

★市民ギャラリー「アート多愛夢」  
6月8日(日)～10日(火) 10時～15時  
「手仕事アラカルト展」

★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き

★カフェクラウド タピオカドリンク100円引き

★どら書房、休憩室(漫画ルーム)あります！ 無料です。

★坐って休める「お休み処」を設けます。ゆっくり散策してください。  
テント、机、椅子準備。場所はまちなか広場、変更する場合があります。

★あなたも自分のお店を出してみませんか？(出店者募集中！)

\*出店申込みは、【毎月20日締切】 コンパネ1枚スペース1,200円～  
九日市愛好会事務局 TEL/FAX(0824)72-8285  
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10(榮笑座内)

【ホームページ】  
<http://www.kunchi-ichi.jp>

